



まなべ ひでき CORE技術研究所 社長 真鍋 英規氏



人材確保・育成にインセンティブ

(現名誉教授)の指導のもと、「道路橋に適用するチャンネル形状プレキャストPC床版に関する研究」で博士号を取得した。

PC構造は、橋梁種別として40%以上を占めているが、入社当時は維持管理の必要性はあまり認識されていなかったという。先駆的に維持管理不足に警鐘を鳴らしていたのが松井教授や京大の宮川豊章教授。「橋梁を視る・診る・看る」ことを基本姿勢とし、併せて「丈夫で美しく長持ちするコンクリート」の実現を目的に13年独立、会社を設立した。

社名のCOREは、「核」という言葉そのものの意味とともに、融合(Composite)、組織化・系統化(Organize)、研究・調査(Research)、工学・技術(Engineering)を表現。維持管理にかかわる点検、診断、設計といったさまざまな分野の技術を融合させ、総合的なコンサルティングサービスを行うのが同社の特徴だ。

「当社には、コンクリートの劣化のメカニズムや補修・補強の設計、施工などに精通した技術者が集まっている。コンクリートのひび割れ一つとっても、原因が塩害やアルカリ骨材反応、中性化など材料そのものにあるのか、ある

「道路・鉄道の橋梁やトンネルなどのコンクリート構造物は、国民の生活に不可欠な社会基盤で、それらの健全性が保たれた上に日々の暮らしや経済活動が成り立っている。しかし、高度経済成長期に建設された膨大な数の構造物が老朽化し、使用者や周辺の人々に対する安全性が危惧(きん)されている。実際、尊い命が失われるような大事故も起き、維持管理の必要性を痛感した」と、真鍋社長は会社設立の背景を説明する。

85年に大阪市立大を卒業した後、PC專業者に入社し、主に新設の設計、施工に携わっていた真鍋社長は在職中の03年、阪大の松井繁之教授

いは構造に起因するのかが正確に究明し、診断結果をもとに補修・補強設計をまとめ、適切な施工方法を提案している。会社を立ち上げてまだ3年だが、当社の技術力は関係者から高く評価されている。

公共事業の維持管理重視の追い風に乗り、初年度から黒字を計上。翌年度は250%の増収、今期はさらに160%増収を見込む。最近では、PC橋梁の詳細調査・診断業務が増加。中でも非破壊検査によるPCクラウト充填(じゅうてん)度調査とその補修・補強設計業務が特に伸びているそうだ。

一方、事業の伸長に備え人材の確保、育成が急務。「中小企業のため新卒採用には苦労する。人生の1枚目のカードとして、会社の規模や知名度にひかれるのは仕方がない。そうした中で見向いてもらうためには、インセンティブが必要」と、来期の採用では奨学金を借りている場合、返済を支援するための最初の冬の賞与で100万円未満を支給する方針だ。

また、社員は当初の11人から3倍に増えたが、多くが20代と30代の若手。現場でのOJTに加え、専門家による講義や大学との共同研究などで技術、知見を習得させる。土木学会、コンクリート工学学会、プレストレストコンクリート工学会など学会活動への参加も奨励。英語の論文を執筆し国際会議で発表する際は、経費を会社が負担する。

「創生期と位置付けたこの3年の間で経営の安定軌道に乗せることができ、自信がついた。次の3年は成長期と位置付け、事業量を現在の2倍程度に拡大し、維持管理分野をけん引する絶対的な存在感のある企業に飛躍させたい」。

一連の維持管理技術をシームレスで提供

建設・不動産業界専門求人サイトの「建設ウォーカー (<http://www.ken-walker.com/>)」でさらに詳しいインタビュー記事がご覧いただけます。